

# 生物研究

第 XII 卷 第 3·4 号

1968

---

THE LIFE STUDY

Vol. XII, Nos. 3-4

November 20, 1968

FUKUI, JAPAN

---

## 目 次

### 報 文

- 濟州島の蜂 (英文) ..... 常 木 勝 次 ... (49)  
 長野県伊那地方のアナバチ科 ..... 羽 田 義 任 ... (55)  
 ヒメツチスガリとニッポンツチスガリの雄について ..... 常 木 勝 次 ... (58)

### 短 報

- セグロアカアシアナバチ台湾亜種の造巣生態について (英文) ..... 常 木 勝 次 ... (54)  
 モモコブキアブラムシの捕食虫 ..... 佐々治 寛 之 ... (59)

### 旅行採集

- ヨーロッパのハチ管見記 ..... 羽 田 義 任 ... (60)

### 採集案内

- 台湾採集案内 (特に蜂採集について) ..... 常 木 勝 次 ... (68)

### 書 評

- A. Burges and F. Raw 編: 土壤生物学 ..... K. T. 生 ... (57)

### 蜂類研究手引 (24)

- (特1) 数種アナバチ科の紹介 ..... (65)  
 会 記 ..... (79)

## CONTENTS

- Tsuneki, K. Some Hymenoptera from Quelpart Island, South Korea ..... (49)  
 Haneda, Y. Some Sphecidae collected in the Ina District, Nagano Prefecture ..... (55)  
 Tsuneki, K. Notes on the male of *Cerceris carinalis* Pérez and *C. nipponensis* Tsuneki ..... (58)  
 Tsuneki, K. Notes on the nesting biology of the Formosan race of *Sphex haemorrhoidalis* Fabr. .... (54)  
 Haneda, Y. A glimpse of the European solitary wasps ..... (60)  
 Tsuneki, K. Guides for the wasp collectors to Formosa ..... (68)

会

規

昆虫学の同好者は、誰でも本会に入会することが出来る。  
 本会は、適宜談話会(当分年二回)を開き、また採集会を行なう。  
 本会は会誌を年2回発行し、会員は自由にこれに寄稿することが出来る(ただし当分1印刷ページにつき全紙文のものは500円だけ、図は1論文1個とし、それ以上の分は原則として著者負担とする。原稿の形式を本誌既出論文に準じ、編集係宛送付のこと。)  
 入会の希望者は、郵便連絡地(勤め先または住所)を明記の上、福井市文京3丁目福井大学教育学部生物学教室生物研究刊行会あて所定の年会費(750円)を添えて申込まれたい。

ヒメツチスガリとニッポンツチスガリの雄について

常 木 勝 次

K. Tsuneki: Notes on the male of *Cerceris carinalis* Pérez and *C. nipponensis* Tsuneki

The species have been believed quite difficult to separate from each other in the male sex. Haneda (1967), however, found the definite difference in the form of the paramere of the male genitalia (Figs. 10 and 11; p. 52). Using the specimens separated by this character the external distinctions were closely examined with the following results:

Characters	<i>carinalis</i> ♂	<i>nipponensis</i> ♂
Mid trochanter	Wholly or nearly wholly yellow	Black or partly yellow
Anterior margin of clypeus	Medianly shortly (often very weakly) dentate	Truncate or gently emarginate
Maculae on clypeus	Absent or present, if present appear on lower portion	Absent or present, if present appear on upper portion
A spine in middle of hind metatarsus	Always absent	Absent or present

ヒメツチスガリとニッポンツチスガリとは、雌では頭楯の形状によって、その区別は容易であるが、雄では非常によく似ていて、傾向的識別または場合的識別はできても、決定的な識別はできなかった(常木, 1961)。ところが最近(1967)羽田義任さんが、正確な分布資料に基づいて外部生殖器の比較研究を行なった結果、両者はその外葉の形状で容易に的確に区別できることが明らかになった。羽田さんの結果は私も多くの材料を使って確認している(p. 52, 図 10, 11)。しかし Genitalia を引出さねばならないということは、なんとしても不便で、その場の役には立たない。そこで手持の材料を使って外からわかる区別点をさがしてみたところ、次のようなことがわかった。わかってみれば、なんでもないことであるが、これまでは、これらは変異と区別できないまま、取りあげることができなかったのである。

(1) 中脚転節 ヒメでは常に全体またはほとんど黄色である。ニッポンでは全体黒か、ときに前縁にわずかに黄条が認められるくらいにすぎない。

(2) 頭楯中葉前縁 ヒメでは中央に、微弱だが歯状突起があり、これが非常に弱いときでも、背面の前方中央部に少しの隆起がある。ニッポンでは直切状か、ゆるく湾入する。前縁背面の中央隆起はない。

なお羽田さんが指摘したように、これならそうだが逆は必ずしも成立しない、という2つの特徴がある。それは

(3) 後脚第1付節の棘毛 ヒメにはこれは常がない。これがあれば(中央部の短毛の中から1本突きでている)ニッポンであるが、ニッポンにもないことがあるから、決め手にはならない。

(4) 頭楯の黄斑 黄斑がある場合、ヒメでは前方に現われるが、ニッポンでは後方(上方)に現われる。ところが両種とも黄斑のないことが多いから、その場合は役に立たない。

次に両種の分布状態を手持の材料、および確かな文献によって記録しておく。

(A) *C. carinalis* Pérez (所検数: 28♀ 20♂):

北海道(定山溪, 1♂), 新潟(朝日岳, 道六神山), 栃木(宇都宮, 日光小田代原), 石川(白山六万山, 岩間), 福井(亀山, 一本松, 岩屋, 打波川沿岸一帯小池まで), 大分(九重山), 対馬(厳原——有明山, 1♂), 屋久島(安房, 1♀1♂)。

(B) *C. nipponensis* Tsuneki (所検数: 22♀ 110♂):

北海道 (定山溪, 多数; 層雲峡, 1♂), 青森 (十和田, 葛川, 碓が関), 岩手県 (下閉伊郡), 新潟 (朝日岳), 長野県 (笹が峯), 栃木 (日光湯本), 石川 (白山六万山, 市瀬, 岩間, 多数), 福井 (おぼ谷, 打波川沿岸一帯小池まで, 多数), 静岡県 (三島), 三重県 (藤原岳), 対馬 (有明山, 1♀), 済州島 (漢拏山, 1♂), 屋久島 (安房, 2♂)

## モモコフキアブラムシの捕食虫

佐々 治 寛 之

1968年の夏, 福井県坂井郡丸岡町川上の実家の庭にある1本のモモの木 (樹高約3m) におびたしいモモコフキアブラムシ *Hyglopterus prini* Fabricius が発生し, それとともに相当数の捕食虫が観察されたので, 調査の結果を報告する。特記ないものはすべて捕食を確認できた種で, 数は周囲から特別の方法を用いず数えたので実際にははるかに多くの個体数がいたと推定される。なお, ホソヒラタアブとヨツボシクサカゲロウは飼育し羽化した成虫によって同定した。

6月23日。ナミテントウ *Harmonia axyridis* Pallas (成虫約40, 蛹12, 幼虫・卵塊多数); ヒメカメノコテントウ *Propylaea japonica* Thunberg (成虫5, 蛹1, 幼虫11, 卵塊3); コクロヒメテントウ *Scymnus (Pullus) hilaris* Motschulsky (成虫3); ヒメアカホシテントウ *Chilocorus kuwanae* Silvestri (成虫1); ホソヒラタアブ *Epistrophe balteata* de Geer (幼虫15)。

7月14日。ナミテントウ (成虫約30, 蛹16, 幼虫・卵塊多数); ヒメカメノコテントウ (成虫3, 幼虫約20); コクロヒメテントウ (成虫2, 幼虫3); ホソヒラタアブ (幼虫約20); ヒラタアブの一種 (幼虫2); ヨツボシクサカゲロウ *Chrysopa septempunctata* Wesmael (幼虫4); ナナホシテントウ *Coccinella septempunctata brucki* Linnaeus (成虫1, 捕食確認せず); キアシクロヒメテントウ *Stethorus japonicus* H. Kamiya (成虫1, 捕食確認せず)。

8月15日。ナミテントウ (成虫約25, 蛹5, 幼虫・卵塊多数); ヒメカメノコテントウ (成虫1, 幼虫3); ホソヒラタアブ (幼虫5); ヨツボシクサカゲロウ (幼虫2)。

上記捕食虫のうちヨツボシクサカゲロウとホソヒラタアブ以外はすべて, 新しい捕食記録である。ほかに, 寄生性天敵と思われるもの多数をはじめ多くの昆虫がみられたが調査の対象としなかった。

なお, この庭内には合計19種の捕食性テントウムシ類が調査期間に確認されたが, そのうち6種だけが調査した木を訪れ, さらに, 2種 (ナミテントウとヒメカメノコテントウ) だけしか積極的な天敵とはみなされなかった。ナナホシテントウ, アカスジヒメテントウなどは庭内に普通で, しかも食餌性のものであるのに, なぜ, この豊富な食餌源に集まらなかったかは, 調査不十分な点があるとしても, ある問題点を提示しているように思われる。また, この木には今年になってから農薬散布は全く行なっておらず, 樹幹にはトビイロケアリが見られたが, テントウムシの飛来をさまたげるほどの数ではなかったように思われる。